

インノミナートが室内に招じいられるやフェデリーゴは晴れやかな顔付によくいらしたという表情を浮かべ、待ちかねていた人を出迎えでもするように両手をひろげて自分の方から近寄った；

「ずっと前に、もう何度も、私の方からあなたのお宅に伺うべきでありました」。
「私の宅へ、あなたが！私が誰か御承知ですか。
私の名前がきちんと伝わりましたか」。

「ご心配なさいませ」とフェデリーゴが激しく、
愛情をこめて相手の手をぐっと握った、
「ご心配なさいませ。あなたの手を握らせてくださいませ」。
こう言いながら枢機卿は両腕をインノミナートの首のまわりに差しのべた。
インノミナートは身を引こうとし、一瞬避けようとしたが、
相手の愛の熱情にほだされたかのように、
あきらめると、彼もまた両腕を差しのべて枢機卿を抱いた。
インノミナートはこの抱擁から身をほどくと叫んだ：
「神はまことに偉大で、まことに善良であります。
いま私には自分が何者であるか、自分の正体がわかりました」

それで枢機卿はインノミナートに「今日はこのご訪問だけでもう用事は済んだとはお考えになりますな。またこちらへお戻りいただけましょうな？」
「戻らないということが一体どうして！」とインノミナートが答えた：「たといあなた様が私をお断りになろうと、あなた様の門前の前に、貧しき者のごとく、突っ立っております。どうしてもあなた様にお話し申したい。どうしてもあなた様のお話をお聞きしたい。あなた様にお目にかかりたい。私、あなた様なしにはおられませぬ！」

アレッサンドロ・マンゾーニ、いいなづけ



キリスト教の出来事は、時間と空間の中で起こる肉体をもつ具体的な現実との出会いという形をとる。今の、生き生きとした、まったく人間的な現実との出会いである。その出会いの決定的な意味は、人間という不確かな存在の内における人となられた神、キリストの現存の見えるしるしだということだ。この出会いは、常に、わたしたちの生を方向づけ、そしてわたしたちの存在に意味を与え統合する。それ以外には、人生・命に新しさの意識をもたらす源は何もない。

ルイジ・ジュッサーニ